



古い民家のつくりを活かした「ぐう」の内装。右下は人気メニュー「直島☆のりのり井」



「ぐう」の営業風景。店名は、おながが鳴る音と「遭遇」の「遇」が語源。学生が経営を学べる現場でもある



低炭素杯2012の授賞式。再生可能エネルギーの使用や、生ごみの堆肥化、地産地消などが評価された

「低炭素杯2012」 最優秀地域活性化賞

香川大学 直島地域活性化プロジェクト

エコカフェで地域を元気に

瀬戸内海に浮かぶ直島は、「直島文化村構想」が80年代後半に始まり、現在は現代アートの拠点として知られる島。直島を含む27の島々からなる香川県直島町は、「環境とアートの島」を掲げ、自然、文化、環境が調和した町づくりを進めている。

「香川大学直島地域活性化プロジェクト」は、直島の古い民家を利用したエコカフェ「和cafe ぐう」を中心に、直島の地域活性化に取り組んでいるグループだ。05年10月、香川大学経済学部の古川尚幸教授が直島を訪ねた折、「お客さんがたくさん来てくれるのに、食事や休憩ができるところが少ない」という島の人々の声を聞いたのがきっかけだった。

古川教授がゼミでその話をする、「自分たちで店をやろう」と学生有志が発案し、プロジェクトが発足。①学生が主体となって経営し、実学を身につける、②地域との交流を通して人間力を身につける、③地域の活性化を図る、を目的に、06年8月5日に「和cafe ぐう」をオープンさせた。営業は観光客の多い土日と祝日だ。

「カフェ経営は甘い気持ちでは務まりませんから、学生一人ひとりが経営者となり、主体的に取り組むかたちになりました。をしたり、夜は海ほたるを観察するなど、自然の大切さを学ぶ交流イベントだ。地元の人とともに観光ボランティアガイドも務めている。



直島への関心、カフェへの関心、子供が好んで交流イベントに参加したという。

「経営を実際にやってみると、予想以上に大変だと分かりました。問題をどう解決していくか、メンバーそれぞれに考え方が違い、教わる事が多くて、すごくやりがいがある。それと、地域のよさを見直すようになりました。島の中でカフ

た。経済学部以外の学生も参加し、関心事を持ち寄っていくうちに、環境対策にも取り組むようになっていきました」と、古川教授は話す。

「ぐう」が「エコカフェ」になったのも、学生たちの発案だった。まず、07年度から、カフェで使う電力に「グリーン電力証書」を導入（証書の購入代金が再生可能エネルギーの維持と拡大に使われるため、購入した分だけ再生可能エネルギーを使ったとみなされる）、温室効果ガスの排出削減に貢献している。

また、食材の廃棄量をできるだけ減らし、生ごみは集めて堆肥化している。11年1月から、リサイクルした堆肥を使い、無農薬のサツマイモを栽培する「いもぷろじえくと」を始めた。さらに、食材は地産地消を心がけており、看板メニューの「直島☆のりのり井」は、直島特産の海苔を使用。直島の海苔の養殖は1965年から始まり、いまや香川県最大の生産地だ。地産地消を進めれば、輸送などにかかるエネルギーの節約になり、地元の経済振興にもつながる。

地域イベントにも積極的に参加している。地元住民団体「うい・らぶ・なおしま」と協力して、「なおしま自然探検隊」を毎年実施。これは小学生と磯辺で釣りエをすると、地元の人たちのつながりの深さを感じる。



地元の子もたちとの交流も盛んだ。卒業生が子どもたちに返すイベントも毎年おこなわれている

直島では、10年に「瀬戸内国際芸術祭」が開かれて、3カ月半の会期中、約93万人の来場者でにぎわった。しかし、島民の人口動態をみると、ほかの瀬戸内海の島々と同様に、過疎高齢化が進んでいる。

「ふとしたきっかけで始まった直島プロジェクトが6年も続いたのは、自分の考えを伝え、活動を受け継ぎ、その時々の問題に取り組む力を持った学生たちが集まってくれたから。島の人たちがあたたかく迎えてくださったのも幸いでした。

この活動は、参加する学生がいなくなると、古川まで続けようと考えています」と、古川教授は話す。

緑あふれる環境と、ゆったりとあたたかい島民性が残る直島に、どう貢献していくか。毎週フェリーで島に通う学生たちは、「環境、経営、地域」について、自分たちができることを模索している。



地元団体主催の直島自然探検隊にスタッフとして参加、釣り大会のあとは魚料理で盛り上がった



「和cafe ぐう」の近くの畑で、木材に代わる紙の素材、ケナフの植樹・刈り取りを手伝う



直島はアートの島。環境フェスタの出店の背後には草間彌生作の巨大なカボチャが